

総論 紀伊半島における中世考古資料

坂本亮太 SAKAMOTO Ryota

紀伊半島は日本列島の東西を結ぶ太平洋海運（航路）の要地で、本州最南端にあたる潮岬半島（和歌山県東牟婁郡串本町）は古来より近代に至るまで海運の難所であった。そのため、中世の太平洋海運を理解するうえでも、紀伊半島の位置づけは重要になってくる。^① 紀伊の中世考古学においては、瀬戸内との関係（備前焼など）はこれまで注目されてきたが、東海地方や四国地方・（南）九州地方の各地とどのような交流事情があったのか、その点を明らかにする必要がある、今回の調査の主眼はまさにここにある。近年では紀伊・淡路・阿波・土佐といった紀伊水道を内海と捉える試みも提示され、^② さらには紀伊と阿波・土佐・伊予・豊後へと至る南海航路の重要性も注目されている。^③ しかしながら、紀伊半島沿岸部の都市・流通を物語る文献史料は乏しく、また中世の考古資料についても（特に熊野地域においては）^④ まとまった発掘調査事例がこれまた乏しく、資料的な限界は否めない。

そういった状況下ではあるが、近年熊野地域における発掘調査の事例が蓄積されつつある。今回、本共同研究で主に対象とした日置川（下）流域においては、安宅氏城館跡（和歌山県西牟婁郡白浜町）の発掘調査が進められ、熊野、とりわけ紀伊半島南西部における中世の様相（考古資料）を示す一モデルとなっている。^⑤ さらに近年では、龍松山城跡・坂本付城跡（和歌山県西牟婁郡上富田町）、里野中山城跡（和歌山県西牟婁郡すさみ町）、結城城跡（串本町）などにおいても発掘調査が行われ、紀伊半島南西部の中世考古資料の集積が進みつつある。^⑥ さらに、表

面採集ではあるが、神田城跡（すさみ町）、虎松山城跡（串本町）において、備前焼等が見つかっている。

一方の紀伊半島南東部においては、一九八〇年代には熊野速玉大社境内遺跡（和歌山県新宮市）の調査が行われたほか、一九九〇～二〇〇〇年代には藤倉城跡・川関遺跡（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）の発掘調査が、^⑦ 三重県側でも一九九〇～二〇〇〇年代に赤木城跡（三重県熊野市）や羽山地遺跡（三重県南牟婁郡紀宝町）の発掘調査が行われ、^⑧ 中世考古資料の蓄積もなされてきた。さらに近年では、熊野川河口部の新宮城下町遺跡（新宮市）、鶴殿西遺跡（紀宝町）も大規模に発掘調査が行われており、目下整理作業が進められている。さらに表面採集ではあるが、佐部城跡（串本町）で備前焼等も見つかっている。

このように熊野地域において近年、徐々に中世考古資料が蓄積されてきてはいるが、まだ緒に付いたばかりというのが現状である。^⑨ 今後、熊野地域をはじめとする紀伊半島における中世考古資料を集成し、その全体像を見通す研究が行われる必要がある。目下整理作業が進む遺跡も多く、現時点で集成を行い、またその全体像を示すことは到底叶わない。ただ、今後、紀伊半島各地の中世遺跡を比較検討するうえにおいても、基礎資料の整理・提示と情報の共有化を進めていくことが求められる。そこで、考古資料編においては、日置川下流域と西庄Ⅱ遺跡の遺物組成の提示を行い、またこれまであまり注目されてこなかった串本町（笠嶋遺跡・地藏道遺跡）やすさみ町（藤原城跡）の中世考古資料につ

いて紹介することで、今後の紀伊半島における流通・交流史に関わる研究の一助となれば幸いである。

なお、近年は石造物を中心とした文化交流、(搬入石材を中心とした)流通などに関する研究の進展も著しく、本共同研究においても部分的に石造物調査を実施したが、その成果は十分に取りいれることができなかった。今後の課題としておきたい。

注

- (1) 市村高男「十二の海道―日本中世の水運と津・湊・泊」(『大航海』一四号、一九九七年)、綿貫友子『紀伊水道およびその周縁部における中世海運・流通の研究』(科研報告書(課題番号18520495)、二〇〇八年)、同「紀伊国における中世海運」(『歴史科学』一六五号、二〇〇一年)、同「紀伊から関東へ 中世における紀伊―南関東の海運に関する若干の補足」(『品川歴史館紀要』一七号、二〇〇二年)など。
- (2) 菱沼一憲「内海としての紀伊水道」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五七集、二〇一〇年)、中世都市研究会編『港津と権力』(山川出版社、二〇一九年)。
- (3) 坂本亮太「大阪湾の「咽喉」―加太・友ヶ島―」(東悦子・藤田和史編『わかやまを学ぶ 紀州地域学 初歩の初歩』清文堂出版、二〇一七年)、北野隆亮「紀伊における戦国時代の鉛インゴットと鉛製鉄砲玉」(『鑄造遺跡研究資料2018』、二〇一八年)など。
- (4) ここでいう熊野地域とは、和歌山県の田辺市・西牟婁郡(上富田町・白浜町・すさみ町)・東牟婁郡(串本町・古座川町・那智勝浦町・太地町・北山村)・新宮市、三重県の東紀州地域(熊野市・南牟婁郡(紀宝町・御浜町)、奈良県吉野郡十津川村を含む範囲を想定してゐる。
- (5) 『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』(白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会、二〇一四年)、同『安宅荘中世城郭群総合調査報告書 補遺編』(白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会、二〇一九年)。
- (6) 西牟婁地域の重要な港と考えられる「田辺湊」に関連しても、検討するための素材がいくつかある。田辺城下町遺跡において、あくまでも参考として土器組成、瓦器と山茶碗の比率も示されている(『田辺城下町遺跡―元町新庄線外1線道路改良事業に伴う発掘調査報告書』財団法人 和歌山県文化財センター、二〇一〇年)。そのほか、鎌倉時代〜戦国時代にかけての田辺市街地の中世遺跡として、松が谷Ⅱ遺跡、上屋敷Ⅰ遺跡、上屋敷Ⅱ遺跡、飯庵主山経塚群、江川遺跡、上野山古銭Ⅱ出土地、上野山古銭Ⅰ出土地、上屋敷Ⅲ遺跡、南新町古銭出土地(いずれも『田辺市史』第四卷、田辺市、一九九四年)などがあり(土師器・瓦器・山茶碗等の報告あり)、今後これらを含めて中世田辺(田辺湊)の流通状況を復原していくことも求められよう。
- (7) 『佐藤春夫記念館建設に伴う速玉大社境内遺跡発掘調査概報』(財団法人 和歌山県文化財センター、一九八九年)、『藤倉城跡・川関遺跡 那智勝浦道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財団法人 和歌山県文化財センター、二〇〇四年)、『和歌山地方史研究』(四一号、二〇〇一年)。
- (8) 『史跡 赤木城跡 保存整備事業報告』(紀和町教育委員会、二〇〇五年)、『紀宝町埋蔵文化財調査報告1 三重県南牟婁郡紀宝町 羽山地遺跡(第1次) 発掘調査報告』(紀宝町教育委員会、二〇一一年)、『紀宝町埋蔵文化財調査報告2 三重県南牟婁郡紀宝町 羽山地遺跡(第2次) 発掘調査報告』(紀宝町教育委員会、二〇一四年)。そのほか、矢ノ森遺跡(熊野市)でも中世の遺物が出土している。
- (9) 『戦乱のなかの熊野―紀南の武士と城館―』(和歌山県立博物館、二〇二〇年)において、城館中心ではあるが、熊野地域で発掘調査が行われた主な中世遺跡、表面採集によって得られた遺物の紹介を行っている。
- (10) 伊藤裕偉『聖地熊野の舞台裏 地域を支えた中世の人々』(高志書院、二〇一一年)、同「鶴殿の中世石塔群」(『ふびと』六六号、二〇一五年)など。